

日本陸軍航空史（その 29）
～航空特攻（4）～

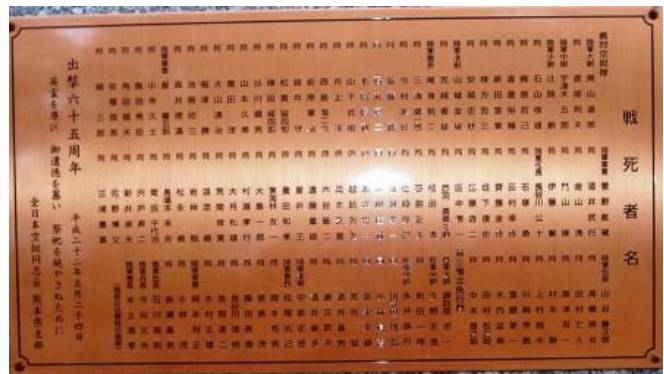
1 はじめに

昨年 10 月 4 日、**健軍駐屯地**を訪れました。私は昭和 44 年 10 月に陸自幹部候補生学校(久留米)を卒業し、**西部方面飛行隊**の見習幹部として健軍駐屯地託麻原(たくまばる)**分屯地**(旧熊本空港)に赴任しました。そして、朝礼や終礼の都度、バラック隊舎脇の**義烈空挺隊碑**に接していました。しかし、昭和 46 年 5 月に分屯地が**高遊原**(たかゆうばる)(現熊本空港)に移り、いつしか同碑が健軍駐屯地に移設されたと聞いていたのですが訪れる機会がなく、今回は実に 39 年振りの参拝でした。

奥山道郎(みちお)工兵大尉(53 期)指揮の**義烈空挺隊 136 名**は昭和 20 年 5 月 24 日 1840 に**第 3 独立飛行隊 32 名**乗り組みの 97 重 12 機に搭乗して健軍飛行場を離陸しますが、4 機が故障等で反転不時着、1 機が未帰還となり、7 機で沖縄の北・中飛行場に胴体着陸による斬り込みを行い(米軍側資料では、北飛行場に突入した 1 機のみが成功したようです)、敵の**飛行機 9 機を破壊、29 機に損傷**を与え、**88 名が戦死**しました。この作戦(義号作戦)で、飛行隊長の**諏訪部忠一大尉**(54 期)以下 24 名の搭乗者も戦死しました⁷⁾。**奥山大尉**は 6 月 10 日に少佐、6 月 15 日に大佐に昇任されています。健軍駐屯地では、平成 22 年 5 月 23 日(日)、出撃 65 周年を記念して慰霊祭が執り行われ、この際、全日本空挺同志会熊本県支部の手によって右下写真の戦死者名銅板が石碑の裏面に貼付され、披露されたようです。



義烈空挺隊碑(筆者撮影)



義烈空挺隊碑の裏面に貼付された戦死者名銅板(筆者撮影)

この銅板名簿と、陸軍航空特攻研究者のバイブル的存在である参考文献 7(以後『文献 7』と略称)の付録 2『隊別・特攻戦没者名簿』とを見比べて疑問が生じました。すなわち、**第 3 独立飛行隊**の戦死者数が、銅板では**水上清孝曹長**が一人加わって 25 名になっていましたし、文献 7 の**義烈空挺隊 藤田久雄伍長**が銅板にはなく、その代わりに**相田 清伍長**が刻まれている、総数 88 名に変化はありませんでした。また、文献 7 の**義烈空挺隊名簿**の**渡辺利夫大尉**が銅板では**渡部利夫大尉**となっており、文献 7 の**宇都木五郎中尉**が銅板では**宇津木五郎中尉**となっていました。

この疑問は、帰京後に健軍駐屯地司令業務室 U1 尉から FAX で頂いた**豊田聯合艦隊司令長官**から**義烈空挺隊**及び**第 3 独立飛行隊**に授与された感状の写(次頁。第 6 航空軍は 3 月 19 日に聯合艦隊司令長官の指揮下に入りましたが、5 月 28 日に**小澤司令長官**となって前任・後任が逆になり、離脱します)と同 1 尉の説明で解消しました。**水上曹長**は、帰投して八代市郊外に不時着した際に火災で焼死したもので、あくまで全日本空挺同志会熊本県支部の解釈で戦死とされたものでした。**渡部大尉**と**宇津木中尉**の姓は文献 7 の誤りと思われる。また、**相田 清伍長**が記された銅板は昨年作成されたものですし、感状にも記載されていますので、**藤田久雄伍長**は文献 7 の誤りだと思われます。

また、独立飛行第 25 中隊の池田 忍軍曹と白井 獣伍長も 2 式複戦で B-29 を体当たり撃墜し、満軍航空部隊の春日園生中尉(満洲国軍官学校第 1 期生、日本人)も B-29 を体当たり撃墜し、散花しました。独立第 15 飛行団はこの日の戦果を、撃墜 14 機、撃破 1 機、損害は戦死 5 名、負傷 1 名、飛行機損失 6 機と報じました。

昭和 19 年 12 月 21 日、B-29 約 30 機が今度は奉天地区に来襲しました。この際、満軍航空部隊の西原成雄少尉(満洲国軍官学校第 2 期生、日本人)は B-29 に体当たりして撃墜しましたが、松平太平少佐(日本人)は敵機に肉薄したところで集中砲火を浴びて散花しました。いずれも旧式の 97 戦による攻撃であり、まことに気の毒です。日本人による満軍航空部隊の活躍もあって、この日以降、B-29 による南満への攻撃は中止され、サイパンからの本土攻撃に切り替わりました。

(2) 本土における防空戦闘

ア 関東方面

昭和 19 年 11 月 1 日から B-29 のサイパンからの偵察活動が始まり、11 月 24 日には、約 80 機が関東地方に来襲しました。これに対し飛行第 47 戦隊の見田義雄伍長が 2 式単戦で B-29 の体当たり撃墜に成功しました。また、12 月 3 日の三鷹付近爆撃に対して飛行第 53 戦隊の沢本政美軍曹が 2 式複戦で B-29 に体当たり散花しました。さらには、飛行第 244 戦隊の四之宮 徹中尉、板垣政雄伍長、中野伍長が 3 式戦で体当たり撃墜したのちに落下傘降下しました(四之宮中尉はその後の昭和 20 年 4 月 29 日、第 19 振武隊長として沖縄の海に散花しました)。

そして、12 月 27 日の B-29 の東京空襲においては、第 10 飛行師団・飛行第 53 戦隊の渡辺泰男少尉が 2 式複戦で、飛行第 244 戦隊の吉田竹雄曹長が 3 式戦で B-29 を体当たり撃墜しました。

昭和 20 年 1 月 9 日、東京はまたも B-29 の大空襲を受け、小平上空で飛行第 244 戦隊の丹下充之少尉が体当たり散花し、高山正一少尉が体当たり後生還しました。また、東京上空では、飛行第 47 戦隊の栗林 尊准尉と幸満寿美軍曹が 2 式単戦で体当たり散花し、その他 2 機が生還しました。結局この日は 6 機を体当たり撃墜しました。

1 月 27 日、東京はまた B-29 の空襲を受け、飛行第 244 戦隊の高山正一少尉(二度目の体当たり)と安藤喜良軍曹、飛行第 47 戦隊の鈴木 精曹長及び常陸教導飛行師団の小林雄一軍曹(鯉渕夏夫伍長同乗)が東京から千葉の間で体当たり散花しました。

2 月 10 日、B-29×100 機が東京を襲い、飛行第 47 戦隊の吉沢平吉中尉、第 1 錬成飛行隊の倉井利三少尉が太田市上空、飛行第 244 戦隊の梅原三郎伍長が筑波山上空で体当たりを行いました。

3 月 10 日未明には B-29×325 機が東京の下町を攻撃して 38 万発 1,700 トンの爆弾を落とし、死者 10 万人(被災者 100 万人)という大きな犠牲を強いられました(御丁寧にも昭和 39 年、これを指揮したルメイ少将に、小泉純也防衛庁長官と源田実元空幕長が推薦人となって、航空自衛隊を作った功績により、勲一等旭日大綬章が授与されています)。

イ 中部・阪神方面

名古屋が初めて空襲された昭和 19 年 12 月 13 日には、独立飛行第 16 中隊(司偵)の中村忠雄少尉が B-29 に体当たりし、これを撃墜しました。また、12 月 18 日には名古屋が再度空襲され、同中隊の中村 靖曹長(鈴木茂男少尉同乗)と古後武雄准尉(関川栄太郎伍長同乗)の 2 機が B-29 を体当たり撃墜しました。さらに 12 月 22 日には名古屋が三度目の空襲を受け、明野教導飛行師団の広瀬吉雄少佐(昭和 18 年 3 月から昭和 19 年 6 月まで飛行第 64 戦隊長)と川上 修大尉が B-29 に体当たりし、伊勢湾上で散花しました。

昭和 20 年 1 月 3 日にはまたも名古屋が空襲され、飛行第 55 戦隊の代田 実中尉、飛行第 56 戦隊の涌井俊郎中尉が、3 式戦で体当たり散花しました。また、3 月 16 日夜の阪神方面の邀撃戦で、飛行第 56 戦隊の緒方醇一大尉が B-29 に体当たり散花しました。

(3) サイパン・ウルシーにおける海軍特攻攻撃

昭和 19 年 11 月 27 日、硫黄島を出撃した海軍『神風特攻隊第 1 御盾隊』の大村謙次中尉以下 11 機はサイパンのアスリート飛行場に突入しました。また、昭和 20 年 3 月 11 日、鹿屋から海軍特別攻撃隊『梓隊』の銀河 24 機は、800 キロ爆弾を抱いて 1,400 哩を飛び、11 機(又は 13 機ともいわれる)がウルシー環礁に突入しました。そして、正規空母『ランドルフ』に 1 機が体当たりをし、戦死 27 名を数える戦果を挙げました。

(4) 硫黄島における海軍特攻攻撃

昭和 20 年 2 月 19 日、米軍は硫黄島に上陸を開始し、凄惨な戦いが始まりました。硫黄島守備隊を掩護するため、2 月 21 日から 3 月 1 日にかけて、海軍『神風特攻隊第 2 御盾隊』の村川 弘大尉以下 45 名が周辺の敵艦船に果敢な攻撃を敢行しました。

そして、護衛空母『ビスマルク・シー』に 2 機が体当たりし、乗員 350 人を乗せたまま沈没させたほか、正規空母『サラトガ』に 4 機が体当たり、2 機が至近弾、護衛空母『ルンガ・ポイント』に 1 機が体当たり、防潜網輸送艦『キオクク』に 1 機が体当たりという大成功を収めました。

次いで陸軍は義烈空挺隊の投入を企図して 3 月 12 日に同隊を西筑波飛行場に集結させ、3 月 19 日から 20 日にかけて硫黄島の二つの飛行場に強行着陸させ、同島を奪還する計画を立てました。しかしその時点で、同島には B-29×4 機、B-24×5 機を含む 76 機が進出していることが分かり、もはや奪還は無理ということで断念されました。硫黄島の戦いは 3 月 26 日に終わり、日本軍の戦死者 20,129 名(戦死率 96%)に対し、米軍の死傷者 28,686 名(戦死 6,821 名、戦傷 21,865 名)で、攻者の損害が防者の損害を上回った稀な戦例となりました。

3 航空総軍等の編成～本土決戦組織の整備～⁶⁾

本土に対する敵の上陸が真剣に検討され始めた昭和 20 年 2 月以降、主上陸地域は関東と九州と見積もられ、3 月には、各地区が分断されても独立した作戦始動ができるように、東日本に第 1 総軍(第 11・12・13 方面軍基幹)、西日本に第 2 総軍(第 15・16 方面軍基幹)の設置が決まりました。

いっぽう、航空については、第 6 航空軍は 3 月 20 日以降海軍の指揮下、教育・補充を行う第 1 航空軍は大本営直轄、各教導飛行師団は航空総監の隷下、航空廠などは航空本部長隷下となっており、本土決戦準備の障害となっていました。そこで 3 月 31 日、地上作戦軍と切り離せない部隊を除いた範囲、すなわち、北東方面を除く内地、朝鮮の全部隊及び教育部隊、航空廠、航空補給廠及び航空関係陸軍病院を統率する航空総軍司令部の編成が発令されました。第 1 総軍、第 2 総軍及び航空総軍司令部は 4 月 15 日に編成完結しました。

航空総軍司令部の隷下部隊は、第 1 航空軍、第 6 航空軍、第 30 戦闘飛行集団、内地の各挺進部隊、輸送飛行隊、陸軍航空輸送部、教導飛行師団で編成された独立飛行隊、各航空廠、独立整備隊、航空情報隊、航測隊、地下施設隊等です。また、教育部隊としては、第 51～53 航空師団、第 2 航空教育団、仙台陸軍飛行学校、東京・大津・大分陸軍少年飛行兵学校、航空基地設定練習部等がありました。総員は 318 名で、部長及び職員の多くは航空本部との兼務でした。

4 敵機動部隊の実態⁴⁾⁵⁾⁶⁾⁷⁾

(1) 航空総監部の見方

航空総監部は昭和 20 年 4 月、特攻運用の規範として、『航空高級指揮官「と」号部隊運用ノ参考』を印刷配付しました。その内容の主旨は次のとおりです。

「機動部隊は、空母 5~6 隻を中心とし、周囲にこれとほぼ同数の戦艦、巡洋艦を配し、更にその外側に十数隻の駆逐艦を配する輪型陣である。これは、2~3 群が連係をとりながら、ほぼ 18 ノットの速度で行動する。昭和 20 年 3 月頃以降は、一群の隻数を半減し、群数を倍加したようである。

機動部隊の索敵能力は優秀であって、50~100 米の超低空で接敵しても、距離約 40 軒で、中空の 3,000 米で接敵すれば約 200 軒付近でレーダーに捕捉される。機動部隊上空には常に十数機の直掩機があり、防空に任じている。すなわち、超低空で接敵しても突入までに 5~6 分間掩護戦闘機の阻止攻撃を受けることになるのである」⁶⁾。

直掩機群を突破すると猛烈な対空火網に阻止されます。殊に空母の高射砲はレーダーに直結しており、性能が優秀でした。また 40 耗級の高射機関砲の火網構成は濃密でした。その装備数の見積もりは右表のとおりです。

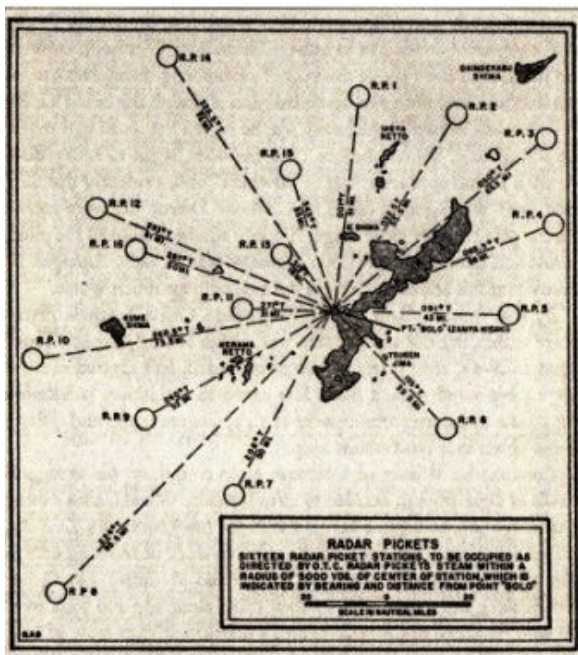
日本軍の観察による米機動部隊の対空火器⁶⁾

艦種	5in 高射砲	40mm 機関砲	20mm 以下
航空母艦	9~16	16~24	16~20
戦艦	20	72	50
巡洋艦	8	16	14
駆逐艦	4	4	4

(2) 米機動部隊の隊形と夜間戦闘能力の実態

機動部隊は右図のような隊形でやってきました。塗りつぶされた船形は空母、B は戦艦、C は巡洋艦、d は駆逐艦です。

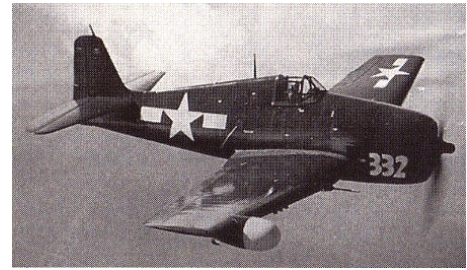
また、米海軍は、下図のように沖縄周辺にレーダー搭載駆逐艦を配置して、早期警戒網を形成しました。



米海軍の洋上レーダー監視網⁴⁾



米海軍は昭和 18 年春から夏にかけて夜間戦闘専用戦闘機 XF6F-3N トムキャットの開発を行い、翌年 4 月までに、F6F-3N が約 220 機生産されました。また、その後、F6F-5N が 1,434 機、F6F-5E が約 500 機生産されました。F6F には**邀撃レーダー**のほかに、**電波高度計**、**味方識別装置**及び**後方警戒レーダー**まで用意されていますから、日本軍には強大な脅威でした⁵⁾。



F6F-5N 夜間戦闘機(右翼端がレーダー)⁵⁾

5 沖縄作戦における特攻(前半)¹⁾³⁾⁶⁾⁷⁾

(1) 沖縄航空決戦準備

ア 決戦参加航空部隊の状況

昭和 19 年 8 月 31 日に**教導航空軍司令部**が編成されましたが、12 月 21 日に、これが改変されて**第 6 航空軍司令部**(司令部は福岡)となり、**菅原道大**中将が引き続き軍司令官となりました。これは、敵の本土上陸に対抗して航空作戦準備を整えるためでした。

第 6 航空軍の主要な隷下部隊は、**第 10 飛行師団**(戦闘 6 コ戦隊)、**第 11 飛行師団**(戦闘 4 コ戦隊)、**第 12 飛行師団**(戦闘 3 コ戦隊)、**第 21 飛行団**(戦闘 2 コ戦隊)、**第 100 飛行団**(戦闘 3 コ戦隊)、**飛行第 7(重爆)**、**第 60(重爆)**、**第 98(重爆)**、**第 106(司偵)**、**第 110(重爆)戦隊**、**独立飛行第 1 中隊(対潜)**、**第 2(重爆)**、**第 3(重爆)**、**第 4(司偵)独立飛行隊**、**第 1 挺進団**などでしたが、比島作戦などで戦力低下した名ばかりの航空師団や新編部隊ばかりで、ほとんど戦力はありませんでした。

台湾の**第 8 飛行師団**(師団長**山本健二**中将)は戦力が充実していました。**第 8 飛行師団**の主要な隷下部隊は、**飛行第 10 戦隊(司偵)**、**第 22 飛行団**(3 式戦 2 コ戦隊、1 式戦 1 コ戦隊、戦闘 2 コ戦隊)、**第 9 飛行団**(3 式戦 1 コ戦隊、1 式戦 1 コ戦隊、3 式戦独立飛行 1 コ中隊)、**飛行第 29 戦隊**(戦闘)、**独立飛行第 41~43(軍偵)中隊**、**第 46~49(軍偵)中隊**で、高砂族の献身的な支援によって、徹底的な分散掩蔽と応急出動を可能としていました。

イ 彼我の航空戦力の状況

日本軍は昭和 20 年 1 月、米英の空母を 17~19 隻、特設空母を約 50 隻、戦艦を約 20 隻、艦載航空機数を約 3,000 機と見積もりました。また、基地航空機数は、米軍 8,500 機、英軍 3,770 機、合計 12,270 機と見積もりました。

対する帝国海軍は、空母 6 隻、戦艦 5 隻を保有していましたが、燃料もなく、空母に着艦できる操縦士もほとんど残っていない状況でした。航空機数は陸軍 1,280 機、海軍 1,055 機、合計 2,335 機でしたが、陸軍は、満洲、支那、南西方面に広く分散配備されていました。

ウ 天号作戦準備

昭和 19 年 12 月末に**捷一号作戦**が挫折し、昭和 20 年 1 月 20 日、我が国初の統合作戦計画『**帝國陸海軍作戦計画**』が策定されました。これは、**本土作戦(決号作戦)**とその外周における**縦深作戦(天号作戦)**から成りましたが、それぞれの特性から、**陸軍は決号作戦**、**海軍は天号作戦**を重視しました。天号作戦は四つに分けられ、**天一号**は主に南西諸島、**天二号**は主に台湾、**天三号**は主に東南支那沿岸及び台湾、**天四号**は主に海南島以西に敵の攻撃があった場合の計画です。海軍は**天一号**、陸軍は**天一号**、**天二号**を重視しました。

2 月 6 日、大本営は、**内地防衛軍**(東部、中部、西部軍)及び**第 17 方面軍**(朝鮮)の戦闘序列(作

戦部隊の編成)を令しました。また、同日、航空作戦に関する陸海軍中央協定が発令されましたが、内容が具体的に示されたのは、3月1日でした。

そして、「海軍は敵機動部隊、陸軍は敵輸送船団を主たる攻撃目標とするが、陸軍はなしうる限り、敵機動部隊の攻撃に協力する」とこととなりました。

また、3月末までの陸軍の整備目標は、「本土方面(第6航空軍)が、要地防空兵力445機(うち司偵45機)、対機動部隊兵力210機(うち特攻140機)、南西諸島方面攻撃兵力525機(うち特攻300機)、予備兵力として4月、5月になるべく多くの兵力を捻出する」とされ、「台湾方面(第8飛行師団)が440機(うち特攻250機)、そして支那方面(第5航空軍)から175機(うち特攻50機)、南方方面(第3航空軍)から40機を台湾に転用する」とされました。これらを合計すると、沖縄・台湾方面に使用予定の陸軍航空機は1,390機で、そのうち特攻は740機という計画になります。

いっぽう海軍は、「本土方面が第3航空艦隊580機、第5航空艦隊520機、防空兵力160機、護衛兵力350機、教育関係部隊2,000機(実用機700機、練習機1,300機)、台湾方面(第1航空艦隊)が85機、南西方面が80機を目標とし、南西諸島方面には第5航空艦隊、台湾部隊、教育関係部隊を使用する」とされました。

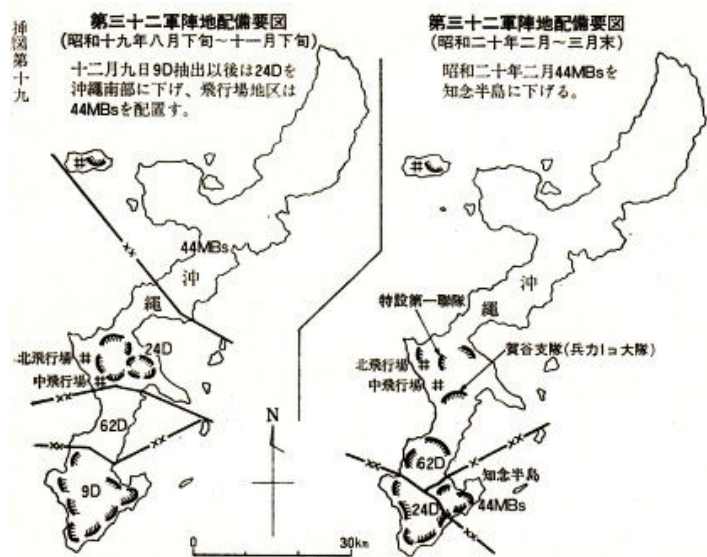
エ 沖縄の地上戦備

昭和19年11月、大本営は、台湾の第10師団を比島に転用した穴埋めとして、沖縄の第9師団を台湾に転用することを決め、第9師団は昭和19年12月中旬から昭和20年1月上旬にかけて台湾に移動しました。大本営は、姫路の第84師団を沖縄に派遣するよう第10方面軍に内示しましたが、沖縄への海上輸送が危険になったことと本土防衛兵力の不足のために、これが見送られました。

第32軍はそこでやむを得ず、昭和20年1月26日、沖縄北・中飛行場を主陣地から外して、戦面を収縮することにしました。これに対し陸海軍関係司令部から両飛行場確保の要望が相次ぎました。



作戦地域区分概況図⁶⁾



第32軍陣地配備要図⁶⁾

そして第 10 方面軍の独立混成第 32 聯隊を台湾から派遣しようとしたが、ウルシー島の敵機動部隊の行動開始により基隆出港が不可能となり、大本营は 3 月 25 日、増派の中止を指示しました。

陸海軍の特攻隊は当時ほとんど沖縄に配備されておらず、反撃能力の欠乏を憂慮した第 32 軍は 3 月 5 日、敵に飛行場を利用させないために、**沖縄の全飛行場を破壊**するよう意見具申しましたが、大本营は 3 月 10 日、**伊江島飛行場の破壊のみを許可**しました。東洋一を誇った伊江島飛行場は、建設に心血を注いだ**第 50 飛行場大隊**の手で、50 キロ爆弾百数十発、黄色火薬十数トンを使用して、十数日かけ、延べ五千名の作業員によって、徹底的に破壊されました。

(2) 沖縄特攻作戦準備と緒戦

ア 海軍特攻の成功と第 6 航空軍の九州進出

昭和 20 年 3 月 10 日、**第 6 航空軍**は、南西諸島方面の航空作戦準備のため、司令部を東京から福岡に移しました。司令部に充てられたのは、福岡市平尾の福岡高等女学校でした。

3 月 11 日、海軍は驚くべき特攻を成功させます。**福田幸悦海軍大尉**指揮の**菊水部隊**梓隊 53 名の**銀河 24 機**(目標到達 15 機)が 3,000 キロを飛んで米海軍ウルシー泊地を攻撃し、**空母 2 隻以上の大破・炎上**を報じました(米軍資料では空母『ランドルフ』が損傷¹⁾)。しかし、米機動部隊の北進を止めることはできず、3 月 14 日に空母十数隻基幹が出撃、3 月 18 日に南九州、3 月 19 日に四国・中国地方が空襲を受けました。

3 月 18 日から 3 月 21 日まで、海軍は猛烈な特攻を行いました。桜花によるものも含めて、この間の特攻戦死者は 308 名でした。この中には**第 5 航空艦隊**の指揮下に入っていた**陸軍雷撃部隊**の飛行**第 7・第 98 戦隊**も含まれています。米軍の記録では、**空母 4 隻、戦艦 2 隻、巡洋艦 1 隻、駆逐艦 1 隻、その他 2 隻**が撃破されたとされています⁷⁾。

3 月 20 日、陸海軍の航空戦力結集のため、**第 6 航空軍**は南西方面作戦に関し、**豊田副武聯合艦隊司令長官**の指揮下に入りました(豊田長官が菅原軍司令官より先任であったため)。

イ 第 6 航空軍の作戦準備

第 5 航空艦隊(司令部:鹿屋)の戦力は激減しており、**第 6 航空軍**だけが頼りでしたが、未だ特攻部隊の掌握ができていないために、第 6 航空軍司令部は福岡に留まりました。3 月 25 日、聯合艦隊は天一号を発動しましたが、この時点において、第 6 航空軍は準備ができていませんでした。

第 6 航空軍の展開計画は、**第 100 飛行団司令部**(団長土井直人中佐):都城西、**同飛行第 101 戦隊**(4 式戦):都城東、**同飛行第 102 戦隊**(4 式戦):都城西、**同飛行第 103 戦隊**(4 式戦):隈の庄、**第 6 飛行団司令部**(団長今津正光大佐):知覧・大刀洗、**同飛行第 65 戦隊**(1 式戦Ⅲ型):知覧・目達原、**同飛行第 66 戦隊**(99 襲):万世・大刀洗、**第 4 独立飛行隊**(百式司偵):熊本・福岡、**飛行第 60 戦隊**(4 式重):熊本、**飛行第 110 戦隊**(4 式重):大刀洗というものでした。

そして、特攻の配分は、**第 6 航空軍**が 15 隊、**第 8 飛行師団**が 11 隊、**中央控置**が 4 隊の計画でしたが、3 月 10 日以降の東京大空襲を踏まえて、優良装備の 6 隊を関東に残地することになりました。しかも 3 月 25 日現在、三分の一が知覧と都城西に到着したばかりであり、その他は推進途中でした。

「第 100 飛行団は新編部隊であり部隊訓練も不十分で、このまま特攻に移行すると部隊が全滅する」と考えた**土井団長**は部隊の集中使用を主張し、特攻隊編成に反対しました。そのため、土井中佐は明野教導飛行師団に転属となり、代わりに常陸教導飛行師団から**傘田弘国少佐**が補任されました。

ウ 陸軍特攻隊の大増勢

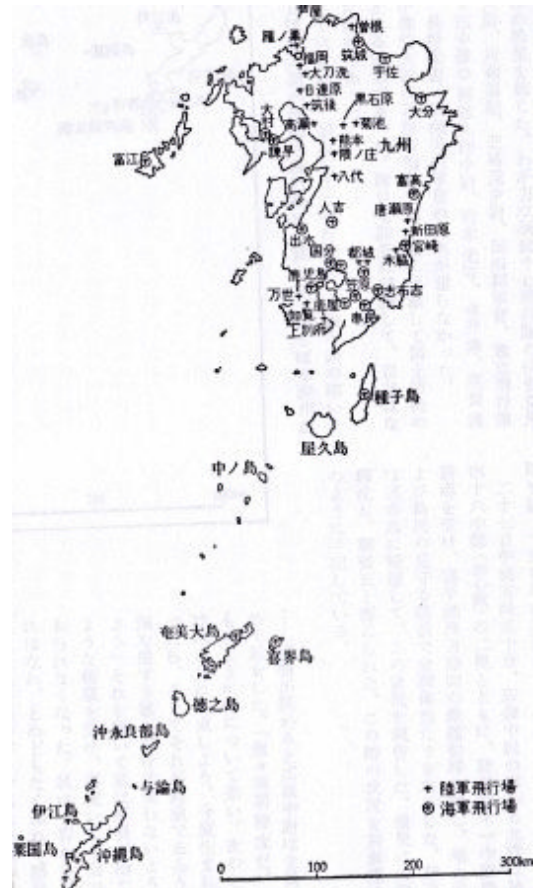
台湾には昭和 19 年 11 月 29 日に比島に使用する予定で編成されていた特攻隊が 3 コ隊ありました。誠第 15～17 飛行隊で、誠第 15 飛行隊は銚田で編成された双軽 8 機、誠第 16 飛行隊は満洲の第 2 航空軍で編成された 1 式戦 12 機、誠第 17 飛行隊は台湾の第 8 飛行師団で編成された 99 襲 12 機の、練度の高い飛行隊でした。

そして、昭和 20 年 1 月 29 日、特攻隊 30 隊（第 18～第 47 振武隊）の編成が発令されました。その編成担任部隊、特攻隊号及び装備機種は次のとおりです。1 コ隊は 12 名、双発機は 9 名の編成でした⁶⁾。

第 10 飛行師団(18・19:1 式戦)、第 11 飛行師団(20:1 式戦)、第 12 飛行師団(21:1 式戦)、第 1 航空軍(28・30:99 軍偵、29:1 式戦、40:97 戦)、第 2 航空軍(31・32:99 襲、39:1 式戦、41:97 戦)、明野教導飛行師団(22・43:1 式戦、26・27・33・34:4 式戦、42:97 戦)、常陸教導飛行師団(24:2 式複戦、35:4 式戦、44:1 式戦)、下志津教導飛行師団(22:99 軍偵)、銚田教導飛行師団(25:99 双軽、45:2 式双襲、46:99 襲)、浜松教導飛行師団(47:100 式重)、大刀洗陸軍飛行学校(36～38:98 直協)。

また、昭和 20 年 2 月 19 日に米軍が硫黄島に上陸するに及び、3 月 20 日、さらに 69 隊(第 48～第 116 振武隊)の特攻隊編成が下令されました。編成人員は前回同様です⁶⁾。この頃から複葉の 95 式 1 型中間練習機まで投入され始めました。朱色に塗られていたために海軍の 93 式中練同様、『赤トンボ』と呼ばれていましたが、最大速度 240km/h の機体で特攻に従事しなければならなくなった隊員の心中はいかばかりかと思えます。

第 8 飛行師団(114:2 式複戦、115・116:97 戦)、第 1 航空軍(70:1 式戦、71～75:99 襲、76～78:97 戦、79～81:99 高練、82～101:95 中練)、第 2 航空軍(102～104:99 襲、105～109:99 襲)、第 5 航空軍(100:3 式戦、111～113:97 戦)、明野教導飛行師団(48～51:1 式戦、54・55:3 式戦、57～60:4 式戦、65～69:97 戦)、常陸教導飛行師団(52・53:1 式戦、56:3 式戦、61:4 式戦、68:97 戦)、下志津教導飛行師団(62:99 軍偵)、銚田教導飛行師団(63・64:99 襲)。



九州・沖縄地区の飛行場図(昭和 20 年 3 月)⁷⁾



特攻に出発するキ9乙(95 式 1 型乙練習機)。カウリングがはずされている

特攻機に転用された立川 95 式 1 型乙練習機⁹⁾

エ 陸軍特攻隊の編成状況

昭和20年4月以降、特攻機の編成は6機とされ、2機の予備が付けられました。操縦士は6名(重爆は8名)、重爆には2名の機上機関員、双発機には2名の機上無線員が搭乗し、各隊には、隊長以外に1名の優秀者を付けました。

4月以降の編成は、4月:62隊(390機)、5月:132隊(792機)、6月:146隊(876機)、7月:83隊(500機)予定、8月:83隊(500機)予定で、予定を含んで506隊(3,058機)とされました。編成された特攻隊は、編成担任部隊で約1ヵ月間訓練して第一線に進出しました⁶⁾。

編成担任部隊は、所属の隊員とともに整備良好な機体を差し出すことになっていましたが、実情は、ネジの取れそうな機体や発動機不調のオンボロ機体も多かったようです。昭和20年5月下旬、陸軍航空本部から望月 衛技師が派遣され、知覧において心理調査を行いました、「特攻隊員の三分の一は最初から希望していなかった」という報告をしています⁷⁾。沖縄戦になり特攻帰還者が激増しましたが、帰還者の中には精神的な問題のほか、実際に飛行機の故障によるものも多くありました。

オ 航空総攻撃前の第8飛行師団による陸軍特攻出撃

3月26日午前4時、第8飛行師団による陸軍沖縄特攻の第一陣が出撃しました。慶良間列島付近で上陸準備中の敵艦船攻撃のため、伊舎堂用久大尉指揮の誠第17飛行隊(99襲)6機で、独立飛行第23中隊の3式戦8機(爆装)の掩護下に石垣島から出撃しました。戦果として空母1隻撃沈、空母2隻撃破、戦艦1隻撃破を報じました⁷⁾が、米軍資料では、戦艦1隻、軽巡1隻、駆逐艦3隻、護衛駆逐艦1隻、掃海駆逐艦1隻、敷設艦1隻の損傷という内容でした¹⁾。この攻撃で、誠第17飛行隊の伊舎堂用久大尉、川瀬嘉紀・芝崎 茂少尉、黒田 釋軍曹、独飛第23中隊の阿部久作少尉、岩本光守・金井 勇・須賀義栄・長野光宏・広瀬秀夫軍曹の10名が散花しました。

3月27日0550、誠第32飛行隊の広森達郎中尉以下9機の第二陣が独立飛行第46中隊(赤心隊)の2機とともに出撃し、大型艦轟沈5隻、同撃破5隻と報じました。米軍資料では、掃海駆逐艦1隻、敷設駆逐艦1隻の損傷という内容でした¹⁾。ただし、輸送船の損害については計上しないことがほとんどですので、ある程度の戦果はあったものと思われます。戦死者は、誠第32飛行隊の広森達郎中尉、清宗孝己・林 一満少尉、今野勝郎・今西 侯・島田貫三・出戸栄吉軍曹、伊福 孝・大平定雄伍長、赤心隊の谷川広士軍曹、三竹 忍伍長の11名でした。

3月28日払暁、赤心隊の鶴見国土郎・上宮賢了少尉、青木健次軍曹、美坂洋男・吉野芳積伍長の5名が、中型艦轟沈3隻、同炎上1隻と報じましたが、米軍資料には損害はありません¹⁾。ただし、輸送船の損害については計上しないことがほとんどですので、こちらの方でしょう。

この日、寺山大尉率いる誠第41飛行隊の97戦9機は250キロ爆弾を抱いて知覧を出撃しましたが、雨と夕闇で敵を発見できず中飛行場に着陸して再出撃を期しました。

3月29日払暁、離陸する9機に艦砲射撃が加えられ、隊長機以下5機が吹き飛ばされ、4機が離陸に成功して艦船群に突入し、中型艦轟沈3隻、同炎上1隻と報じましたが、米軍発表では損害はありません¹⁾。ただし、これも輸送船だと思われます。重症を負った寺山大尉は、部下の突入の様子を無念と感謝の涙で見守りました⁷⁾。突入戦死したのは、高祖 一少尉、小川真一・堀口政則軍曹、大河正文伍長でした。

また、この日、笹川 勉大尉率いる誠第39飛行隊の1式戦15機は、南九州から沖縄に向かっていましたが、天候不良のため、全機徳之島に着陸しました。

3月31日、笹川大尉以下5機が出撃しましたが、2機が天候不良で引き返し、そのうち1機は徳之島上空でグラマンに撃墜され、笹川 勉大尉、高橋晋二少尉、瓜田忠治伍長の3機が突入に成功しました。米軍資料にはこの日、敷設駆逐艦1隻、上陸作戦用輸送艦1隻、戦車揚陸船2隻の損傷が記されています¹⁾。

(3) 沖縄航空総攻撃緒戦

ア 特攻機による上陸破砕戦闘

4月1日、第20振武隊(隊長:長谷川 実大尉)5機が知覧から出撃し、目標を発見できずに引き返しますが、山本秋彦少尉が単機で慶良間列島付近の敵艦船群に突入を成功させました。また、知覧から第23振武隊5機が出撃しますが他機は故障し、隊長伍井芳夫大尉だけが突入を果たしました。機体の修復が完了した3機は午後突入し、金子龍雄准尉、大橋治男・藤野正行曹長が戦死しました。また、飛行第65戦隊の久保貞二軍曹が大型輸送船に突入しました。

台湾方面からは、飛行第17戦隊特攻隊の平井俊光中尉、兒子国高・勝又 敬・国谷弘潤・西尾卓三少尉、照崎善久・西川福治軍曹の3式戦7機が同日早朝に石垣島を発進、慶良間列島周辺の敵艦船群に突入しました。また、夕刻に石垣島を発進した誠第17飛行隊の久保元治郎少尉と有馬達郎伍長は、嘉手納西方の大型艦船に夜間突入しました。

まだ新田原にあった誠第39飛行隊の1式戦6機も同日1910に発進し、沖縄北・中飛行場西方洋上で上陸準備中の輸送船団に体当たりを行い、宮永 卓・吉本勝吉・面田定雄少尉、内村重二・税田存〇(文字不明)軍曹、松岡己義伍長が散花し、誠第39飛行隊の全戦力が消滅しました。

米軍資料には、上陸作戦資材輸送艦2隻、上陸作戦用輸送艦1隻の損傷が記されています¹⁾。

4月2日午前4時、徳之島を発進した第20振武隊長谷川大尉、山本英四少尉の2機と飛行第66戦隊の高山 昇中尉(飯沼良一軍曹同乗)機が沖縄西方の敵艦船に突入を成功させました。

台湾方面からは、早朝、宮古飛行場を発進した誠第114飛行隊(2式複戦)の大井清三郎伍長が中飛行場沖の敵輸送船団に突入したのに続き、夕刻、竹田興光・原 照雄・矢作一郎少尉、井上忠雄軍曹、伊藤喜三・馬締安正・藤井広馬伍長が同目標に突入し、赫々たる戦果を挙げて部隊が消滅しました。米軍資料には、上陸作戦用輸送艦4隻、戦車揚陸船1隻の損傷が記されています¹⁾。



出撃のために三角兵舎から搭乗機へ向かう隊員たちを見送る町民(知覧町取違にて)⁸⁾

4月3日未明、万世を発進した第62振武隊の坂本友恒・込茶 章・鈴木 満少尉は0730頃、第23振武隊の前田 敬・柴本勝義・塩島清一少尉、豊崎儀治・清水保三軍曹の5機と第22振武隊の伊東信夫少尉機は1530に知覧を発進、薄暮時にそれぞれ敵艦船に突入しました。

台湾方面からは、払暁に石垣飛行場を発進した飛行第105戦隊(3式戦)長谷川 濟少尉、石田勝・小川多透・永田一雄・丸林仙治・山元正巳軍曹の6機が、残波岬西方の敵艦船に突入しました。

また、九州に残されていた誠第32飛行隊の、結城尚弼・小林 勇少尉、時枝 宏軍曹、古屋五朗・

佐藤英実・佐藤 正伍長の 6 機が新田原から発進し、直路沖縄の敵艦船群に突入しました。結城少尉は部下を目標上空まで誘導し、攻撃の状況を確認してから沖縄に着陸して上級部隊に報告したのち、再び離陸して敵艦に突入するという、非常に沈着冷静な行動をしました。米軍資料には、護衛空母 1 隻、掃海駆逐艦 1 隻の損傷が記されています¹⁾。

4 月 4 日は悪天候で特攻攻撃はありませんでしたが、4 月 5 日午前 6 時、知覧を発進した第 21 振武隊須藤治韶軍曹が沖縄の敵艦船に突入を成功させました。

おわり

次回は「航空特攻(6)」

< 参 考 文 献 >

- 1) 「特攻」(平成 19 年 5 月 森山 康平著 (株)河出書房新社)
- 2) 「陸軍航空の鎮魂」(昭和 54 年 3 月 2 版 航空碑奉賛会)
- 3) 「陸軍特攻振武寮 生還した特攻隊員の収容施設」(平成 21 年 12 月 林えいだい著 (株)光人社)
- 4) 「特攻 空母バンカーヒルと二人のカミカゼ 米軍兵士が見た沖縄特攻戦の真実」(平成 22 年 7 月 Maxwell Taylor Kennedy 著 中村有以訳 (株)ハート出版)
- 5) 「空の技術」(平成 22 年 3 月 渡辺 洋二著 (株)光人社)
- 6) 「戦史叢書 陸軍航空の軍備と運用(3)」(昭和 51 年 5 月 防衛庁防衛研修所戦史室)
- 7) 「陸軍航空特別攻撃隊史」(昭和 52 年 12 月 生田 惇著 (株)ビジネス社)
- 8) 「群青 知覧特攻基地より」(平成 9 年 1 月 改訂 2 刷 知覧高女なでしこ会編 高城書房出版)
- 9) 「航空情報別冊 太平洋戦争 日本陸軍機」(昭和 44 年 10 月 (株)酣燈社)